

Vihāra Project

科学研究費補助金基盤研究(A)

「グプタ朝以降のインド仏教における僧院と世俗性」

(課題番号:22H00002 英文タイトル:“Monasteries and Secularity in Indian Buddhism from the Gupta Period Onward”)

[ヴィハーラ プロジェクト]

September
2023

Vol.9

ニューズレター第9号

JSPS招へいプログラム:Abhishek Amar氏講演会の報告

研究代表者の久間泰賢は、2022年度JSPS外国人招へい研究者(短期)プログラム(研究題目:Bodhgayaの学際的研究)を通じて、美術・建築・考古学研究班および外部評価班のメンバーであるAbhishek Singh Amar氏(ハミルトン・カレッジ)を招へいした。2022年11月5日から12月24日までの滞在期間中、同氏は以下の講演を行った。

第1講演題目: Interactions with Built Environments of Bodhgaya

開催方式: 原則としてオンライン(関係者のみ対面)

日時: 2022年11月19日(土) 15:10~16:10

会場: 東京大学東洋文化研究所3階 大会議室

本講演は、2022年度開催のキックオフシンポジウムにおいて実施したもので、第8号に要旨を記載済みである(当日のchairの古井龍介氏が執筆を担当)。

第2講演題目: International Buddhist Monasteries and Modern Worship at Bodhgaya

開催方式: 原則としてオンライン(関係者のみ対面)

日時: 2022年11月23日(水・祝) 16:00~17:30

会場: 東京大学東洋文化研究所3階 大会議室
(※当日は第二会議室に変更)

仏教世界の中心地Bodhgayaは、ここ数十年で大きく発展した。経済自由化以降のインドにおけるBodhgayaの発展の速度は急激で、研究が追いつかないほどである。特にユネスコ世界遺産に認定された2002年以降は、インド仏教の巡礼地として多くの巡礼者や観光客を惹きつけている。このことは、数多くの新たな仏教僧院や宗教施設、瞑想センター、そしてホテルやカフェのような旅行者向けのイ

ンフラに明らかである。特にBodhgayaで数が増えている国際的仏教僧院は、現地の景観に組み込まれつつ、宗教的実践・儀礼の拠点となっている。加えて僧院は、アジア内外の対話の場、その対話の記録を保存する場となる可能性も秘めている。社会的・政治的・宗教的に発展しつつあるBodhgayaの複合的な様相については、今後の研究が求められる。Amar氏は、1950年から2022年に至るまでのBodhgayaの発展を4つの局面(1950-60: ネルーのアジア政策、1960-1980: 国際的仏教僧院の建造、1980-2001: ツーリズムの促進、2002-: ユネスコ世界遺産認定以降)に区分しつつ、Bodhgayaの発展には、国家や民族を超えた仏教共同体が重要な役割を果たしていることを強調した。そのことは、200以上の国際的仏教僧院の存在に現れている。さらに同氏は、Bodhgayaがこのような国際的巡礼地に変容したことが、ネルーの政策、国家や民族を超えた仏教共同体、およびユネスコ世界遺産としての地位とどのように関わり合っているかという点も論じた。

第3講演題目: Reimagining Hindu History: Rematerialization of Settlement Mounds and Buddhist Sculptures in the Magadha Region

開催方式: 対面

日時: 2022年12月3日(土) 15:30~17:00

会場: 京都大学吉田キャンパス本部構内
総合研究2号館 第8講義室

Bihar州のGaya地区におけるBodhgaya地方の100以上の村には、古代・中世の仏教遺跡のマウンド、彫像、寺院が残されている。これらの仏教遺跡の多くは、その原初的・歴史的な文脈を失ったものの、新たに置き換えられた社会的・



講演会(11月23日)のポスター

共同体が用いた解釈上の戦略と、それらの戦略がより広範な地域における歴史／物語および場を形成した過程を検討した。Amar氏が豊富な写真資料を用いて示したのは、古代・中世の史跡、図像、碑文、寺院がいかにしてGaya地区の村々で再利用され、新たな歴史／物語の形成をもたらしたかという点である。これらの歴史／物語は、時間性の欠如、真正性、そして連続性を伴う過去という側面を有しており、現地の人々のアイデンティティにとっても重要である。遺跡と歴史／物語が場の形成を促進し、その場が地域の重要な宗教的拠点として機能したのである。

第4講演題目：Reimagining the Buddhist Landscape of Ancient Rājagṛha/Rajgir

開催方式：対面

日時：2022年12月13日(火)15:30～17:00

会場：名古屋大学東山キャンパス

文系総合館7階 カンファレンスホール

Rajgirは、歴史上のブッダが滞在し、多くの経典もそこ(霊鷲山)で説かれたとされており、仏教史において重要である。しかし実際にこの地が探索されたのは19世紀のことであり、発掘が行われたのは20世紀に入ってからである。それらの調査と発掘に続いて、複数の仏教徒の集団がこの地の再生に着手した。1969年には、日本山妙法寺が仏舎利塔



京都大学での講演会(12月3日)の様子

宗教的文脈のもとで、宗教的目的のために使用されている。本講演では、Bodhgaya・Kespa・Makhdumpur・Kurkiharを取り上げて、地域共同体が自身の歴史／物語を生み出すために、仏教の過去のマテリアルを再利用してきた具体的な手法を扱った。その際、特に地域共

(Vishwa Shanti Stupa/World Peace Stupa)を建造した。続いてタイやビルマを含む他の多くの仏教教団も、Rajgirに寺院を建立した。21世紀に入って、新たにナーランダー大学が創建されたことも注目を集めた。さらに州政府は、歴史遺産巡りのウォーキング、ロープウェイと庭園の設置、Rajgir近郊の大仏の建立を通じてツーリズムを促進した。こうした州政府の戦略は、歴史遺産の保護やツーリズムの促進と連動するような、文化史・社会経済史における特定の諸要素を強調する。そして考古学は、現代のインドにおける特別な物語を作り上げる手段となり、中央・地方の政策と結びつくのである。また、19世紀以降の考古学的業績の多くは、文献中心に構成されてきた仏教史を見直すものとなったが、一方では多宗教的なRajgirの「生きている」歴史を無視するものでもあった。Amar氏は、「生きている」ジャイナ教とヒンドゥー教の共同体の重要性、そしてRajgirの「死んだ」歴史と「生きている」歴史との緊張関係についても説明した。本講演会の内容は、聖地Bodhgayaを考察する際にも有益なものであった。

なお、上記の講演会の企画・開催にあたっては、以下の方々(敬称略)のご協力をいただいた。ここに記して深甚の謝意を表する。

・協力研究者：島田明(美術・建築・考古学研究班責任者)、古井龍介(碑文資料班責任者)、三田昌彦(名古屋大学人文学研究科 歴史学)、宮崎泉(写本文献資料研究班責任者)

・2022年度プロジェクト研究員：小崎良行(大正大学)、中山慧輝(京都大学)

Amar氏は、講演会の開催を通じて国内の歴史学者、文献学者、文化人類学者たちとの学術交流を活発に行うと同時に、本プロジェクトにも多くの知見をもたらした。Amar氏の学識を主軸としつつ、聖地Bodhgayaを学際的に検討し、様々な角度から光を当てることができたというのが、今回の招へいプログラム全体を通じての所感である。研究者間のネットワークが今後もさらに展開することを期待したい。

※講演会の基本情報の記述は、JSPSに提出した報告書に拠っている。また、本稿の講演要旨の部分は、Amar氏が作成した英文要旨に基づくものである。

(報告：研究代表者 久間泰賢 三重大学)

美術・建築・考古学研究班によるインド調査の報告

2023年1月から2月にかけて、本研究班は西デカンとベンガル地方の仏教僧院遺構の調査を行った。調査には班員の島田、Nicolas Morrissey (ジョージア大学)、Abhishek Amar (ヴィザの関係により、19日から21日のマルダ調査のみ参加) の他、西デカン後期仏教石窟を専門とするPia Brancaccio氏 (ドレクセル大学) と、ベンガルの僧院建築に関する博士論文を準備中のLouis Copplestone氏 (ハーヴァード大学) が参加した。我々はまずムンバイに入り、今科研で数次の調査を予定しているカンヘーリー石窟を訪れた。インド考古局ムンバイ管区長官のRajendra Yadav氏の案内のもと、一般の立ち入りが制限されている85～87窟の仏塔群 (図1) や、南丘の遺構群の予備調査を行った結果、中世初期のものと見られる



図1

石積仏塔や寺院跡など、いくつかの重要遺構を確認することができた。Yadav氏のご尽力により、調査は今後3年間、考古局の正式な認可を受けたプロジェクト (Mapping of Kanheri Project) として進められることとなった。

カンヘーリー調査の後、我々は東ベンガルの主要遺跡と博物館を訪ねるべく、バングラデシュのダカに移動した。バングラデシュ国立博物館では学芸員のNabi氏のご厚意により展示品の撮影が許され、所蔵品の基礎調査を行うことができた。続いて訪れたモイナマティでは、Shalban vihāra, Rupban Mura, Itakhora Mura, Latikot vihāra, Queen Mainamati Moundの遺構調査と、モイナマティ考古博物館の収藏品調査を行った。この地域最大の僧院遺構であるAnanda vihāraと、三基の仏塔を並べた特異な伽藍構成で知られるKutla Muraは、軍用地の中にあるため、見学は許されなかった。続いて北部の街ボグラに向かい、ここを拠点としてパハルプルのSomapura mahāvihāra (図2) の他、Vasu vihāra, Bihār Dhap, Gokul Medh, Halud vihāra, Jagaddala mahāvihāraの遺構調査と、パハルプル、モハスタンガル、ディナジプル、カントノゴルの考古博物館と、ラジシャヒのVarendra Research

Museumの所蔵品調査を行った。北部での調査を終えてダカに戻る途中、今回の調査にご協力いただいたSwadhin Sen氏 (ジャハーンギールナガル大学) を訪ね、今後の調査研究への助言をいただいたのも、大きな収



図2

穫であった。ダカを離れた後、我々はコルカタから北上してマルダに向かい、パーラ朝のMahendrapāladēva王治世7年銘の銅板碑文が発見されたことで名高いジョゴッジバンプルのNandadīrghi vihāraとマルダ博物館を訪れた。復元修復の結果、Nandadīrghi vihāraの遺構は発掘時から大きく姿を変えており、遺構から発見された多数のテラコッタ彫刻の原位置を推定するという、当初の調査目標は達成できなかった。一方、遺構の周辺を細かく探索した結果、未発掘の多くのマウンドや溜池の存在を確認することができた。

余裕のない調査日程に加え、車での長時間の移動や、濃霧による渋滞など、厳しい条件が重なった調査であったが、Sen氏や考古局の方々のご協力により、ベンガルの主要な僧院遺構や出土品に関する貴重な資料を得ることができた。当地の仏教僧院遺構は中央広間の床面を低くして排水溝を設ける点などにオリッサの僧院建築の共通性が見られる一方、十字形プランの高塔型仏塔や僧院の腰壁を飾るテラコッタ彫刻にはビルマの僧院建築との繋がりも窺わせるなど、インドと東南アジアの結節点にふさわしい、興味深い建築的特徴が見られる。また、寺院の壮大な規模や複雑な建築プラン、多様な素材や技法を用いた彫刻表現は、中世前期における当地での仏教の造形活動の隆盛を雄弁に物語っている。テキストと対照した尊像の比定を中心に進められてきた同地方の仏教美術研究であるが、図像解釈だけにとどまらない、包括的な建築史、美術史研究を進展させる必要性を、今回の調査で感じた。

(報告: 班責任者 島田明
ニューヨーク州立大学ニューパルツ校)

今後の予定

2024年1月から2月にかけて、美術・建築・考古学研究班がインドでフィールドワークを実施します。また、今年度末には外部評価班が*Āryavasiṣṭhasūtraの講読会を実施する予定です。

活動報告

2023年3月26日に、研究代表者の久間泰賢が5th edition of Bodh Gaya Global Dialogues 2023にオンラインで参加し、本研究に関するプレゼンテーションを行いました。インドの方々を中心に、本研究を知っていただくよい機会となりました。また、2023年5月から9月にかけて、写本文献資料研究班がオンライン研究会を計3回開催しました。同研究班メンバーの望月海慧氏・宮崎泉氏を中心として、Atiśaに帰せられるSarvasamayasaṃgrahaを講読しました。

2023年9月8日から14日にかけて、写本文献資料研究班による国際ワークショップが開催されました。大正大学と京都大学を会場として、ハイブリッド形式で実施しました。今回はPéter-Dániel Szántó先生(エトヴェシュ・ローランド大学)をお招きして、Suhrillekhaのサンスクリット語原典などを講読しました。また、Bhikṣu Hejung先生(ハンブルク大学・中央僧伽大学校)にはJñānaśrimitraとRatnakīrtiの著作を読んで比較検討していただきました。

以上の活動の詳細については、ニューズレター第10号で報告する予定です。

写本文献資料研究班による講読会の経過報告

写本文献資料研究班では、僧院の世俗性を分析するにあたり、望月海慧氏(身延山大学)の主導で、密教の三昧耶(samaya/dam tshig)に関する概説書であり、Dīpaṃkaraśrījñāna(Atiśa)に帰せられているSarvasamayasaṃgrahaを取り上げ、その校訂テキスト作成の予備的作業として、チベット語テキストの解説を行っている。そのサンスクリット写本は現存しないが、チベット語テキストから三昧耶を通して金剛乗の優位性がどのように説明されていたのかを知ることができる。この文献には多くの先行研究が存在する。国内ではたとえば羽田野伯猷氏や、近年では藤田光寛氏や遠藤祐純氏によるものがあり、国外のインド・チベット仏教研究もしばしばこの文献に言及する。それらの研究に基づきつつ、特に本研究班が企図するのは、未確認の引用の同定を含むテキスト校訂と、僧院の世俗性という観点からの内容分析である。以下に、望月氏にまとめて頂いたこれまでの研究経過と今後の見通しを提示しよう。

テキストは導入部と本論に大別できる。導入部には、真言乗の優越性を示すために多くの論書が引用される。TrivikramaのNayatrāyapradīpaやRatnākaraśāntiの名前で引用されるTriyānavyavasthānaのように典拠の確認できるものもあるが、Nāgārjuna, Indrabhūti, Jñānapādaなどの引用は典拠が確認できない。しかしながら、未確認の引用の中には、後代のチベット文献に引用が確認されるものもあり、それらはこのSarvasamayasaṃgrahaから引用された可能性もある。

本論は、「三昧耶とは何か」として列举された20項目に対して、19項目が論じられている。19/20項目は、(1)所依、(2)原因、(3)根本、(4)本体、(5)語義解釈、(6)区別、(7)名称の異門、(8)足数、(9)記号、(10)魔、(11)敵、(12)損なう量、(13)損なわれていない印、(14)回復、(15)点検、(16)回復したこと、(17)損なう罪過、(18)損なわない利益、(19/20)三昧耶の集成/結果である。それぞれの解説は、簡略なものから詳細なものまである。中でも特に注目すべき点だけをいくつかまとめておく。

「三昧耶の足数」には、一般的な小乗の根本過犯から始まり、波羅蜜乗、所作タントラ、行タントラ、瑜伽タントラ、大瑜伽タントラにおける三昧耶の条項数が列举されるが、その詳細は述べられていない。チベットのTsong kha paやmKhas grub rjeは、この数字の総数が各条項の合計と合わないとするが、この数字をどのように読むべきかについては検討を要する。最後の「三昧耶の集成/結果」においては、波羅提木叉の律儀、菩薩乗の律儀、金剛乗の律儀に区分し、さまざまな観点から金剛乗の優位性を詳論してテキストが結ばれる。

このようなこれまでの経過をふまえて、今後も引き続き望月氏を中心に研究をさらに進めていく予定である。

(報告:班責任者 宮崎泉 京都大学)

[ヴィハーラ プロジェクト]

印刷 株式会社コムラ **Vihāra Project 第9号**

科学研究費補助金基盤研究(A)

「グプタ朝以降のインド仏教における僧院と世俗性」ニューズレター

編集・発行 Vihāra Project 事務局

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577 三重大学人文学部 久間泰賢研究室内

2023年9月20日発行

